

令和2年度 第1回南信州民俗芸能継承推進協議会 総会 会議録

日時：令和2年5月27日（水）13:30～15:20

場所：南信州広域連合事務センター201・202 会議室

出席者：別紙のとおり

1 協議事項

協議事項は全て承認された。

2 意見交換

テーマ：今後の事業推進について

<國學院大學 小川教授>

コロナウイルスの蔓延で社会が不安定になってきていて今までどおりいかないことが多くなっている状況で、私が今一番注目しているのは、今後の日本全体の人口動態がどのように動いていくかということ。各市町村はこの動向をしっかりと見据えて、魅力ある市町村をつくるのが課題になってくると思っている。

今後の事業推進については、次の5つのことがポイントになると考えている。

1つ目は、南信州が持っている文化的な価値をしっかりと認識し、将来に伝えていかなければいけないということ。南信州では、映像記録や報告書作成をしているが、こういう活動が、南信州の魅力を表現し、客観的な基盤を作っていくと思う。

2つ目は、官と民、民俗芸能伝承者の3者をどう連携させるかということ。「南信州民俗芸能パートナー企業制度」は、地域文化継承の側面と働き方改革の側面があり、全国に展開し得る南信州モデルである。この「南信州民俗芸能パートナー企業制度」の実質化をもっと図る必要がある。

3つ目は、民俗芸能団体の横の連携をどう作っていくかということ。1つの団体では解決できない課題について、複数の団体が協力し合い、解決策を考えていくことが必要。

4つ目は、若い人たちのモチベーションをどう高めていくのかということ。国の地方創生による支援も可能になった。文化財指定も大きなモチベーションに繋がると思う。

5つ目は交流人口による活性化を図るということ。出身者、縁故者、南信州ファン、芸能マニア、観光客、伝統野菜の定期購入者などといった交流人口との関係性をどう作っていくかが課題だと思う。南信州の民俗芸能のためのNPO法人なども今後必要になるだろうと思っている。また、山村留学はそれぞれの自治体が積極的に考えていかなければいけないと思う。宮崎県西都市の銀鏡（しろみ）神楽という芸能がある地域では、銀上（しろがみ）学園という小中一貫校を作り学校を維持し、神楽も維持しているが、小学校の児童16人のうち、13人は山村留学の児童である。地域おこし協力隊による応援隊や、ボランティアセンターなども作ることも有効だと思う。民俗芸能の保存継承は、地域社会全体に関わる問題であり、物産とリンクさせることによって、農村が持っている

る地域力、地域の個性を主張できるようになるので、この協議会は民俗芸能が核ではあるが、もう少し大きいところで考えてほしい。行政をサポートするもう一つの組織体として、文化と地域を結び付け、さらに交流人口と結び付けていくコーディネーターの役割を担うNPOのような組織を作っていく必要があるのではないか。これが今後の大きな課題だと思っている。また、人口動態がどうなっていくかという時、南信州の文化と他の地域とを結び付けていくときに、Wi-Fi環境の整備は絶対に必要。それが無ければつながりが遮断されていくということは目に見えている。

<長野県立歴史館 笹本館長>

櫻井専門研究員が報告した研究業績は、この地域のお祭りを全国に対して訴えた素晴らしいものである。こうした研究を次々に進展させていくことが大事なことである。そのためには、お祭りの後継者だけでなく、研究者の後継者を作っていく必要がある。南信州のお祭りは、長野県内でもまだまだ知られていないというのが実情。いかにして知ってもらえるかを考えなければいけない。コロナウイルスの状況も踏まえると、今後は芸能の動画などをいかに見ってもらうことができるかが鍵になるように思う。また、南信州の魅力を県内他地域に説明に行くことも必要になってくると思う。

横の連携どうするかということは大きな課題だと思う。上からの繋がりだけでは弱い。もう一度基本に戻り、南信州の芸能は誰のために、何のために残さなければいけないのか、これを常に意識すること。そうしないと前に進めないと思う。

本来人間は群れを成す動物であるが、今回のコロナウイルスはそれと全く逆の動きである。それを乗り越えて新たな祭りや文化を作っていくかといえない。今、南信州の芸能は試されているし、南信州はそれを乗り越えられる力を持ち、そのための支援者を持っていると思う。

<東京福祉大学 宮田特任准教授>

コロナウイルス対応で、必ずしもオフィスにいなくても仕事はできるんだということに皆が気付いた。自然と文化に恵まれた南信州への移住は中長期的には十分あり得る話だと思う。今年から来年といった短期的には、今までとかなり違った形で乗り切らざるを得ないと思う。外部との物理的な交流が難しい今、南信州の中での団体間の交流に力を入れてもいいのではないかと。特に若手・中堅が交流する場を考えていただきたい。しかし、コロナウイルスが収まるまでの間、繋ぎとめておかなければいけない人たちが外にもいるので、外部との結び付きも維持しなければいけない。人が来ることができるとしても、今までのように密集して熱く盛り上がるのは難しい。観客を入れずにライブ配信を行うといった方法もあると思う。YouTubeでライブ配信し、チャンネル登録してくれた人との繋がりを保っていられるような仕組みも考えられる。

<和合の念仏踊り 平松会長>

和合には念仏踊りの他に日吉のお鞆祭りもあり、そちらは担い手不足で立ち上がれない状況である。そういう状況の中、念仏踊りの方から若い人たちを応援にやろうとして

いたが、続けられず、神事のみとなってしまっている。残念だとは思いますが、そういうことがどんどん増えると思っている。みんなで力を合わせてやっていきたいと思う。

<南信州交流の輪 関代表>

お祭りとお祭りは繋がっていると思うし、観光には食が大事だと思う。南信州交流の輪としては、お祭りと一緒に、そのお祭りにちなんだ食文化を伝えてきた。いろいろな横の繋がりがあがるが、食文化という視点で繋がりを、伝承していきたいと思う。

<國學院大學 小川教授>

これまでの取り組みの検証と評価をするということについて、どういう検証と評価をするのが大切である。通常こういう評価には、定量的な評価と定性的な評価の2つに分けられ、今までは定量的な数値による評価が先行してきた。しかしここ2~3年は、特に行政の事業については定性的な評価が重視されるようになってきた。このように協議会を作り、地域文化について相対的に見ている地域は、南信州地域以外にはあまり例が無いと思う。こういう形ができたということがすごく大きく評価される。数字的にも、パートナー企業制度の数の多さは評価される。定量的な評価と定性的な評価の両方をしっかりと押さえて検証してほしい。そういう検証をしたその先に次の事業展開が期待できると思う。

<南信州地域振興局 丹羽局長>

事業の見直しを行う上で、検証を行うことは重要なことだと思う。コロナウイルスの状況と、地域の高齢化、担い手の減少という状況を踏まえて考えていく必要があると思う。横の連携については、同じ種類の芸能を持つ者同士の連携や、似た課題を持つ者同士の連携などが必要だと思う。総務省で関係人口が議論されたときに、遠居の者と近居の者の2つが議論され、結果的に注目を浴びているのは都会に住む人たちのような遠居の者であるが、こういった民俗芸能の継承を考える時には近居の者をしっかりと掴んでいくことが大切だと思う。地域の文化を語れる人が多くいるということは大切なことだと私も思う。「長野県地域発元気づくり支援金」は団体に対する支援ではなく、事業に対する支援であるので、事業を見直していくことで、新たに支援ができるものと思う。

「南信州民俗芸能パートナー企業制度」については、お金の支援だけではなく、建設業者による舞台の補修など、企業の得意分野での支援も考えられるので、そういう仕組みも検討が必要だと思う。Wi-Fiについては、リニアに向けても整えていかなければいけないものである。事務局の見直しについては、何をしたいのかということをしっかり考えた上で、どういう組織が良いのか考えることが必要だと思う。

<豊丘村 下平村長>

今、企業にとって、社会と共にあるということが重要視されており、今回のコロナウイルスの件で、SDGs や ESG、CSR などへの企業の関心は、さらに高まっており、企業版ふるさと納税の制度も活用できると思う。企業が困っていることは、どういう地域に寄付するかということ。他所には無い南信州特有の緻密な連携がある点や、これからリ

ニア・三遠南信自動車道が通るこの地域は、都会から近くて住みやすい地域であり、リモートワークをする場所としても注目されることは間違いなく、企業が南信州の文化や自然にお金を出す理由があると思う。地元のパートナー企業にも応援していただき、日本中の意識の高い企業からも応援してもらえるような地域を作っていく。南信州の持つ伝統文化が地域発展の礎になるためのひとつの呼び水になるのではと考えている。

<國學院大學 小川教授>

企業版ふるさと納税は9割が経費でみられる措置である。個人のふるさと納税より少し分が悪い。企業にとっては、残りの1割をどうするかということが結構高いハードルである。どうやったらお金を出してくれる企業が納得してくれるか、南信州全体で考えていかなければいけない。こういった文化事業を行うのに、税金だけでやっていくのは難しくなっていることは確かなので、そのコストを、誰が負担するのか考えたときには、これからはクラウドファンディングや企業版ふるさと納税の活用も検討しなければいけない。

<南信州文化財の会 吉澤代表>

今田人形の例で申し上げる。地域のお祭やいいだ人形劇フェスタが中止、地区の文化祭も中止になりそうであり、子どもたちが出演する場所が無い。そうすると練習したとしても目標が無く力が入らない。学校も今まで休みだったので時間が無い。こういう時にどのようにしていけばいいのか困っている。

<飯伊市町村教育委員会連絡協議会 代田会長>

学校現場からも、人形劇の発表機会がなくなってしまったことについて相談を受けることがある。こういう時こそ知恵を絞ろうと話している。プロ野球でも無観客で試合をする。無観客でも、番組を作ったりして配信すれば、今までは30人くらいの観客だったのが、全国1万人に見られるようになるかもしれない。そんなことを考えるチャンスでないかと思っている。

昨年度遠山天満宮の霜月祭りが10年ぶりに復活した。東京の高校生が8人で踊った。海外留学を来年に控え、日本の伝統文化を学んでレポートすることが必須になっている高校生たちである。高校生が踊ると言ったら、地元の小学生と一緒に踊りたいということになった。当日までに全員の高校生が来たのは1回だけで、あとは遠隔で練習した。今年度どうするかはあまり心配していない。東京の高校生の希望者は今年100人いて、今すでに和田小学校の遠隔システムを使って練習している。もし一緒にできなくてもこのまま遠隔で繋いでやっていこうと、今から準備している状況である。

こういう時だからこと逆にチャンスになることがあると思う。今回のことで次のことができるいろいろなきっかけがあると思う。新しい動きをいかにキャッチして共有して新しいものを生み出していくか、これは単独では難しいので、横の連携で情報交換ができれば、この1~2年の中で十分できることだと思う。

<売木村 清水村長>

売木村では、約 260 年前に疫病が流行ったと聞いている。人々が観音堂で 48 日間念仏を唱える念仏講という行事がある。高齢化で、一番先頭に立っていただいている方は 92 歳となり、継承が危ぶまれている。しかし、お陰様で I ターンの人が参加してくれることになり、中には外国人が一緒になって正座してやってくれている人もいる。こんな形で継承ができています。売木村では山村留学もやっており、今年で 38 年になるが、山村留学の子どもたちも稲荷祭りというお練りに参加してくれている。

<事務局>

今年はいこれまでの検証をしっかりとっていきたい。検証に当たってはそれぞれの団体の皆さんとも意見交換しながら、未来に向かって進んでいきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。